

新約聖書のルーツを求めて

— その統計解析 —

中川 正宣

東京工業大学

nakagawa@nm.hum.titech.ac.jp

三宅 真紀

東京工業大学

miyake@hotmail.com

赤間 啓之

東京工業大学

akama@dp.hum.titech.ac.jp

佐藤 研

立教大学

◎共観福音書の成立仮説

聖書はあらゆる時代を通じて広く世界の人々に親しまれ、永遠のベストセラーと呼ばれている。特に、イエス・キリストの劇的で魅力的な生涯の記述を中心とした新約聖書は、キリスト教徒以外の人々にも、時代や地域を越えて大きな精神的影響を与えてきた。

その新約聖書の核をなす福音書と呼ばれる文書はマルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの四書から成り立っている。新約聖書を読む人はすぐにも気づくことだが、そのうちマルコ、マタイ、ルカの三福音書には重複する記述が多く(表-1)、その文章の一字一句までがまったく一致している場合すら時には見受けられる。このことから、これらの三福音書は共観福音書と呼びならわされている。

なぜ共観福音書には重複する記述が多くみられるのだろうか。福音書が記述されたとき、同じ資料や口伝が利用されたからと考えるのが自然であろう。ではこれらの福音書の成立以前にどのような資料が存在し、各福音書はそれら資料をもとに、どのように成立した

のだろうか。これについては18世紀ようやくその厳密な文献学的研究が開始された。爾来多くの仮説が提出され論議されてきたが、ここで、これまで挙げられてきた仮説の中で、代表的なものを以下に示す¹⁾。

1) 原福音書説

D. F. MichaelisやG. E. Lessingにより提唱されたもので、三福音書著者は、現存しない「原福音書」なるものを用いていたと考える説である。この「原福音書」は、アラム語で書かれていたと仮定される。さらに、J. G. Eichhornは、「原福音書」は、イエスの死後5年ほどして成立し、のちにギリシャ語に翻訳されたと考え、この説を補強した。この説は、共観福音書の共通部分はかなり説明ができるが、マタイとルカ福音書にのみ現れる共通部分がどのようにして成立したかについて説明することはできない。

2) 断片説

F. D. E. Schleimacherにより提唱されたもので、三福音書は、個々の話を最初は個々に小さくまとめていき、それらを集め、編集して成立したと考える説である。しかし、この説においては、福音書の全体構成の一致に対する説明ができない。

3) 伝承説

これは、J. G. HerderやJ. C. L. Gieselerにより提唱されたもので、三福音書は、口頭伝承をもとにして、それぞれ別個に成立したと考える説である。この説は、様式史研究への下地となった。しかし、福音書の相互関係を解明するには不十分である。なぜなら、個々の個所における逐語的な一致や、物語やイエスの言葉の順序における一致についての説明ができないからである。

以上の3つの説の重要なポイントは、共観福音書間の直接的な相互関係はないとする立場をとっていることである。しかしこの立場は、共観福音書間における細部にわたる語彙の一致、また構成の一致を説明できず、

| マタイ3, 7-10 | ルカ3, 7-9 |
|---|--|
| <p>7 彼は、ファリサイ派とサドカイ派の者たちの多くが彼の〔施す〕洗礼にやって来るのを見て、彼らに言った、 「まむしの裔め、やがて来るべき怒りから逃れるようにと、誰がお前たちに入れ知恵をしたのか。8 ならば回心にふさわしい実を結べ。9 そして、『俺たちの父祖はアブラハムだ』などと心の中でうそぶこうとするな。なぜなら、私はお前たちに言う、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができるのだ。10 すでに斧が木々の根元に置かれている。だから、よい実を結ばぬ木はことごとく切り倒され、火の中に投げ込まれるのだ。</p> | <p>7 そこでヨハネは、彼から洗礼を受けようとして出てきた群衆に対して語り始めた、 「まむしの裔め、やがて来るべき怒りから逃れるようにと、誰がお前たちに入れ知恵をしたのか。8 ならば悔い改めにふさわしい実を結べ。そして、『俺たちの父祖はアブラハムだ』などと心の中でうそぶき出すな。なぜなら、私はお前たちに言う、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起こすことができるのだ。9 すでに斧も木々の根元に置かれている。だから、よい実を結ばぬ木はことごとく切り倒され、火の中に投げ込まれるのだ。</p> |

表-1
 マタイ・ルカ並行箇所例 (佐藤 研訳)

問題を解決するに至っていない。

そこで次に出された仮説が、福音書著者は、1冊ないしは複数の福音書を用いていたと考える、「利用説」である。これは、J. J. Griesbachにより提唱された。しかし、どの福音書がどれを資料として用いたのかについては、19世紀半ばまでさまざまな論議がされた。伝統的には、マタイ福音書が最古のものであるとされている。Th. ZahnやA. Schlatterは、この伝統を受け継ぎ、マタイ→マルコ→ルカという時間的順位を主張した。その一方で、K. Lachmannは、マルコの物語の順序がマタイ、ルカによって継承されていることから、マルコが最も古く書かれたもので、マタイとルカがマルコを資料として用いたと考えた⁵⁾。これが、「マルコ優先説」である。しかし、この説だけでは、福音書間の相違についての適切な説明ができない。こうして、「マルコ優先説」を踏まえて提唱されたのが、「二資料説」である。

4) 二資料仮説

「二資料説」は、C. H. Weissによって立てられ、H. J. Holtzmannによって聖書学的・総合的に叙述された²⁾。これは、「マルコ優先説」を前提とし、マタイ・ルカ福音書のみに見える個所が頻出することから、マタイとルカ福音書は、マルコ福音書とは別の資料を用いていたことを想定した。一般に、この資料を「Q資料」と呼んでいる。「Q」は、「資料」を意味するドイツ語Quelleの頭文字に由来し、イエスの語録を中心にイエス伝承を収録した、原始キリスト教の文書と考えられている⁸⁾。

つまり、マタイ・ルカ福音書は、共通の資料としてマルコ福音書と「Q資料」をそれぞれ用いたと考える説である。同時に、マルコ福音書の著者は、「Q資料」を用いてはいないと考えている。また、マタイ、ルカ福音書の直接的な相互関係はないとしている。この仮説は、長い間論議されつづけてきた「共観福音書問題」への最も説得的な解決法としてみなされ、現在の聖書学においては、ほぼ定説化している。

5) 小一致 (minor agreements) 問題

しかしながら、定説となった「二資料説」に反対する見解も出され、今日でも例外的に主張されている。

なかでも、「マルコ優先説」に否定的な立場をとる説が代表的である。共観福音書の成立過程について、J. J. Griesbachが提唱した、マタイ→ルカ→マルコという時間的順位を支持しながら、W. R. Farmerは、マルコ福音書は、マタイ、ルカ福音書を資料にして、それらを縮小したものと考えている⁷⁾。

さらに、マタイとルカ福音書が、マルコ福音書を資料として用いていることが明らかに分かる個所について、若干ではあるが、マルコの語句に対してマタイとルカが一致して食い違っている部分がある。この部分が「小一致 (minor agreements)」と呼ばれおり、「二資料説」では説明がつかないところである。これが、「小一致 (minor agreements) 問題」であり、「二資料説」に対する訂正を迫り得るものである。

この問題の解決策として、H. J. Holtzmannは、マルコ福音書の以前に存在した「原マルコ福音書」を想定し、マタイとルカ福音書は、この「原マルコ福音書」を資料

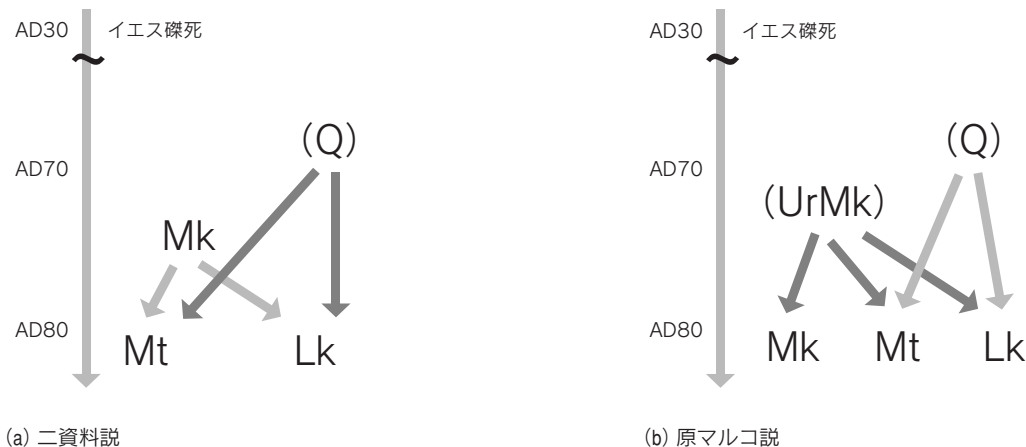


図-1

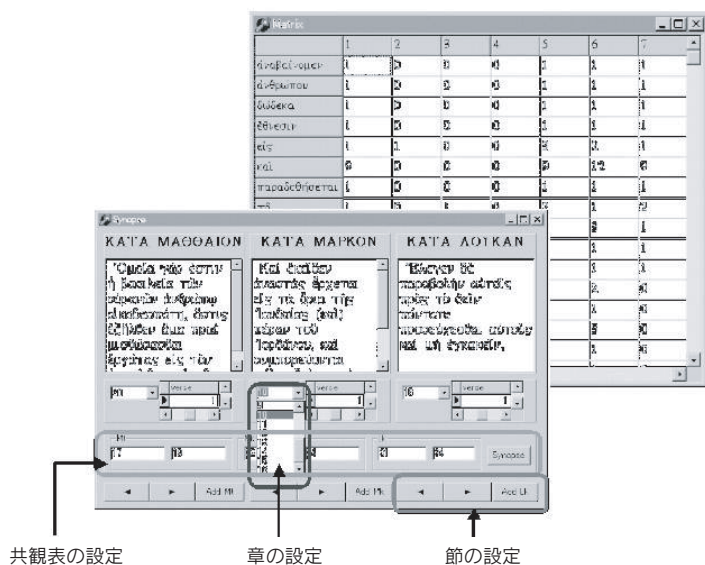


図-2
共観表ソフトウェア

にして用いたと考えた⁷⁾。これが、「原マルコ説」である。しかしながら、この説は、「二資料説」を覆すほど決定的なものとはいえない。

以上から、現在最も有力な二説、すなわち二資料説と原マルコ説は以下のようにまとめることができる。

● 二資料説

マルコ福音書が最も早く書かれ、マタイ、ルカの福音書著者は、マルコ福音書と「Q資料」と呼ばれる現存しない資料の2つを用いたとする説(図-1(a)参照)。

● 原マルコ説

二資料説のマルコ福音書のかわりに、三福音書はすべて、現存しない「原マルコ福音書」なる共通の資料を用いたと考える説(図-1(b)参照)。

◎ 仮説の統計的検証

しかしながら、前述したように、これらの説を含め、現在提唱されている仮説で三福音書の重複についてすべてを矛盾なく説明できるわけではない。またコンピュータによる研究が盛んになったことを受けて、1960年に聖書研究のため3つの研究所が設立されて以来、コンピュータを駆使した聖書研究は数々行われてきたものの、共観福音書に関して厳密な統計的手法を用いた実証科学的な研究は、ほとんどなされていない状態であった。

そこで我々は、まず、新約聖書ギリシャ語原典のコンピュータを用いたデータベースと検索システム、および単語の出現頻度分布の計算システム(共観表ソフト

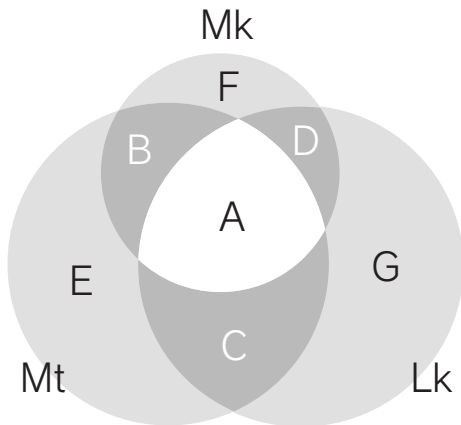


図-3
7つのカテゴリー

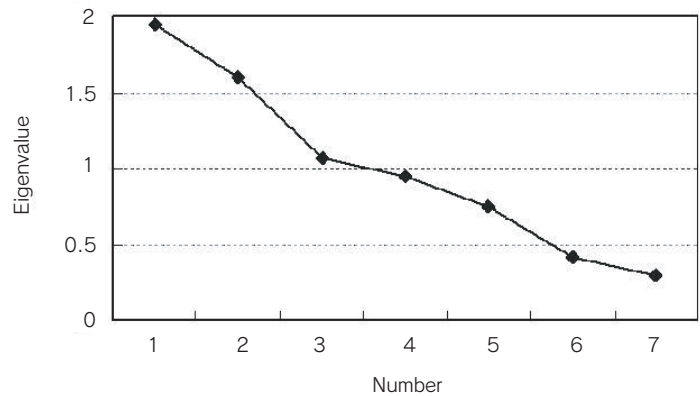


図-4
固有値スクリープロット

ウェア、図-2参照)を構築し、そのデータを用いて主に前記の主要な2つの仮説に焦点を当て、仮説検証のための統計解析を行った。

まず3つの共観福音書の重複部分および独自部分を分かりやすく図示すると、図-3のように7つのカテゴリーに分けることができる。三書共通部分 (Com: A)、マタイ・マルコ共通部分 (Mt-Mk: B)、マルコ・ルカ共通部分 (Mk-Lk: C)、マタイ・ルカ共通部分 (Mt-Lk: D) と、それらの共通部分を除いたマタイ (Mt': E)、マルコ (Mk': F)、ルカ (Lk': G) の各部分である。

これら7つのカテゴリーには当然重複部分は存在しないが、だからといってこれらのカテゴリーがすべて異なる7つの資料から成立しているとはいえない。たとえば図-3のうちの2つのカテゴリーが同じ資料の別々の部分を引用していたとすると、重複は生じないものの、単語の出現頻度の分布は、全体としてかなり類似しているはずである。

そこで、各カテゴリーでの単語出現頻度数 (3) を用いて、これら7つのカテゴリー間の相関係数を計算し、その結果に、因子分析を用いると、これら7つのカテゴリーが準拠したであろう、独立したオリジナルの資料を推定することができる。たとえば、図-3のA+B+C部分とD部分からおのおの独立の因子 (オリジナル資料) が推定される場合は、各因子は「マルコ資料」因子、「Q資料」因子と考えられ「二資料説」が支持される。一方A+B+C+D部分をすべて含む一因子 (原マルコ因子) が推定されれば「原マルコ説」をうまく説明できることになる。

◎劇的で魅力的…かもしれない結果

しかしながら、実際の因子分析の結果は当初の我々の予想を越えたものであった。前記の2つの仮説がともに否定されてしまったのである。

因子分析結果

図-4から、因子数は4個を推定するのが妥当であると判断できる。したがって、因子数を4つに推定して、バリマックス回転で因子分析を行った。ここで、第4因子までの累積寄与率は79.2%であった。

バリマックス回転前と回転後の7つの分類についての各因子負荷量をそれぞれ表-2、表-3に示す。ここで、各因子の因子量の絶対値が大きい値については、太字で表した。

表-3において、第1因子は、B部分とF部分に大きな正の負荷量を持ち、またD部分に大きな負の負荷量を持つ因子が抽出された。第2因子においては、E部分が大きな負の負荷量を持ち、対してG部分が大きな正の負荷量を持っている。第3因子は、A部分に大きな正の負荷量を持ち、D部分に大きな負の負荷量を持つ因子が抽出された。そして、第4因子は、C部分に大きな正の負荷量を持ち、またB部分に大きな負の不可量を持つ因子が抽出された。

考察

因子分析の結果、A+B+C部分とD部分がそれぞれ独立した2つの因子が抽出されず、また、A+B+C部分とD

| | FACTOR1 | FACTOR2 | FACTOR3 | FACTOR4 |
|-----------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| COM (A) | 0.4188 | 0.0127 | -0.8461 | 0.1541 |
| Mk-Mt (B) | 0.4757 | -0.5442 | 0.1256 | -0.5168 |
| Mk-Lk (C) | 0.3212 | 0.6134 | 0.2902 | 0.5101 |
| Mt-Lk (D) | -0.8426 | -0.0192 | 0.1473 | -0.0603 |
| Mt' (E) | -0.3748 | -0.6909 | 0.0616 | 0.4440 |
| Mk' (F) | 0.6521 | 0.0765 | 0.4523 | -0.0626 |
| Lk' (G) | -0.4042 | 0.6641 | -0.1327 | -0.4302 |

表-2
回転前の因子負荷量

| | FACTOR1 | FACTOR2 | FACTOR3 | FACTOR4 |
|-----------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| COM (A) | -0.0460 | 0.0142 | 0.9553 | -0.0164 |
| Mk-Mt (B) | 0.5238 | -0.1178 | 0.0214 | -0.7188 |
| Mk-Lk (C) | 0.3711 | 0.0968 | 0.0048 | 0.8226 |
| Mt-Lk (D) | -0.6630 | 0.0270 | -0.5427 | -0.0297 |
| Mt' (E) | -0.3637 | -0.8054 | -0.1637 | -0.1046 |
| Mk' (F) | 0.7916 | 0.0192 | -0.0847 | 0.0736 |
| Lk' (G) | -0.3543 | 0.8073 | -0.1478 | 0.0894 |

表-3
回転後の因子負荷量

部分をともに含むような1つの因子も抽出されなかったことから、想定した「二資料説」、「原マルコ説」のいずれのモデルにも当てはまらない。したがって、今回の分析結果からは、聖書学で立てられた仮説は否定され、別の成立方法を考える必要が生じる。

ただし、これらの分析は、あくまでカテゴリー間の相関係数に基づいており、どのカテゴリーがどのカテゴリーより前に成立したかという時間的成立過程を客観的に明らかにするものではない。そこで、この事実を踏まえた上で、あえてこの分析結果にあうように成立過程を想定すると以下ようになる。

第3因子から、三文書共通のA部分が1つの独立した因子として存在していることが分かる。この因子を、全文書に共通していることから、歴史上実際に起こった出来事を表している「史的事実因子」と考え、文書成立上の土台であると想定する。

次に、第1因子のB、F部分との相関および、第4因子のB部分との相関から、「マルコの部分」が「史的事実因子」に加わるかたちで表された想定する。

つまり、これら3つの因子が中心となって、文書が成立したと想定するわけである。また、第1・第2因子のE部分の負の相関から、第1因子(すなわちマルコの部分の一部)に対して「マタイ的部分」(第2因子の主要部)が若干否定するようなかたちで現れ、さらに、第4因子のC部分の相関、第1・第3因子のD、G部分の負の相関、および第2因子のG部分の相関から、これらの因子(すなわち最初に成立した主要部分とマタイ的部分)を大きく否定するかたちで「ルカ的部分」が付加されたと想定される。

以上をまとめると、「史的事実(A)」に「マルコの部分(B, F)」が付け足され、それらに相反するかたちで「マタイ的部分(E)」が加わり、さらにそのマタイ的部分に相反するかたちで「ルカ的部分(G)」が加えられたという、従来の仮説とはまったく別の共観福音書の成立過程が示唆されており、非常に興味深い。

ただこれらの分析は単語の出現頻度分布と、それらの相関関係だけに基づいたものであり、単語の意味内容はまったく考慮されていない。今後は各因子における単語の出現頻度分布(いわゆる因子得点)と各単語の意味の関係を考察し、特に各福音書の時系列的成立過程を含めて、上記の大胆な新仮説の可能性をより詳細に検討したいと考えている。

参考文献

- 1) Conzelmann, H. and Lindemann, A.: *Interpreting the New Testament*, trans. by Siegfried, S. Schatzmann, Peabody (Hendrickson), 45-53 (1988).
- 2) 加藤善治: 様式史, 編集史, 文学社会学, 現代聖書講座, 日本基督教団出版社(1996).
- 3) ジョン・S. クロップペンボルグ他: Q資料・トマス福音書, 新免 貢訳, 日本基督教団出版社(1996).
- 4) 小林 稔: 福音書問題, 現代聖書講座, 日本基督教団出版社(1996).
- 5) 橋本滋男: 共観福音書, 総説・新約聖書, 日本基督教団出版社(1981).
- 6) 三宅真紀, 赤間啓之, 佐藤 研, 中川正宣: 因子分析による共観福音書問題の解析, 統計数理, Vol.48, No.2, pp.327-337 (2000).
- 7) Neiryneck, F.: *The Minor Agreements of Matthew and Luke against Mark*, Leuven University (1974).
- 8) 佐藤 研: Q文書, 現代聖書講座, 日本基督教団出版社(1996).
(平成14年8月8日受付)

